3　表音文字は表音という手段により表意を目的とする文字であること

前項で、表音文字は表語文字の代用品であることは動かすことのできない事実である、と述べました。然し、代用品でも、本物より優れていることもありますから、代用品だからと言って、一概に軽蔑することはできません。問題は、機能の点でどうかということです。

さて、文字の機能は、“視覚による思想の伝達”ということにあります。この点で、思想を形成する単位である言葉を、そのまま直接に表現している“表語文字”が、最も理想的な文字であることは、前項に述べた“道路公団による実験”で明瞭に証明されています。

“山”“川”“月”“花”……文字を一目ちらっと見ただけで、文字の目的である“意味内容”が迅速にしかも確実に掴み取ることができます。

表音文字を用いる英語では、mountain, river, moon, flower……となり、漢字では一字で済むものが、四字から八字もの“文字の集合体”になり、読み取りの機能において漢字に劣ることは明瞭です。

ところで、もう一度、mountain, river, moon, flower……の綴りをよく観察して頂きたいと思います。これらのwordsを構成している文字は、疑いもなく“表音文字”ですが、これらの文字は、決して、これらのwordsの持つ音声を表してはいません。

四字または八字から成る“文字の集合体”が、全体として、word の持つ“音声”と“意味”とを表している、と見るべきであって、個々の文字そのものは、決して“音声”を表してはいません。

mountainという綴りは、mauntinと発音しなければならぬことを、決して要求していません。いや、そういう発音は、この綴りからは出て来ないのです。この意味では、ローマ字は“表音文字”でありながら、決して“表音的（フォネチック）”ではありません。

現在の西欧諸国の表記は、すべて“表音的”ではなく、むしろ“表意的”です。文字の集合体が word を表現していますので、これら“文字の集合体”は一種の“表語文字”である、と言うべきだと思います。

表音的であるべき“表音文字”が表音的でない、というこの現象は一体どうして起ったのでしょうか。一見不可解に思われることですが、文字の機能の上から考えますと、その理由がうなずかれます。

表音文字は、表語文字の代用品として誕生したものです。表音は、止むを得ない手段であって目的ではないのです。表語文字でない以上、表音という手段によって、“表語”するより他に仕方がないわけで

す。

ところで、言葉には、まぬがれがたいものに、音韻の変化があります。言葉に音韻の変化があった場合、その新しい発音に合せて綴りを変えることは、word を破壊することです。“文字の集合体”である word が、“表語”を目的としていて、“表音”が単なる手段であるとするならば、発音に変化があったからと言って、これを変える必要はないわけです。

だから、言葉が時代と共に変化していけばいくほど、西欧諸語の綴りは“表音的”でなくなり、“表語的”“表意的”になって行くわけです。

その一つの例として、英語の“one”について、その変化の歴史を調べてみたいと思います。one, two, three の“one”です。

現在の one の発音は wʌn ですが、英語の語源辞典に拠りますと、16 世紀には、その発音が ouni:という発音であったことが判ります。one を表音的に発音しますと、ouni:となりますから、one という綴りは 16 世紀の ouni:という言葉の発音を忠実に表したものであることが判ります。

one という言葉は、その後、末尾の“e”が発音されなくなって、oun という発音に変り、さらに変化して現在の wʌn という発音になりました。しかし、表記の方は、16 世紀の時の ouni:という発音を表す one という綴りを固守して、少しも変化していません。

私たちは、この事実が何を物語っているかを、よく考えてみる必要があります。もしも、表音文字が、表音を目的とする文字として作られた文字であり、“表音”に価値があるとするならば、その言葉の発音に変化を生じた場合、その変化に合った綴りに改めなければならないはずです。

ところが ouni:から wʌn に至るまで、言葉の発音が甚だしく変化して行ったのにもかかわらず“表音的”でなくなったのを無視して、one という綴りを守り通して来たということは、“表音”が目的ではなく、この文字を用いる人々が“表音”に価値を認めていなかったことの証拠だと私は思います。

表音性よりも、one という綴りが持つ“表意性”の方に価値を認めていたからこそ、表音性を失った綴りを大切に守り通したのであって、そう考えなければ、この事実を説明することはできないではありませんか。

くどいようですが、自分の国の言葉を外国の文字で書き表すのには、“表音”という手段に頼るより他に方法がなかったので、“表音的”

表記法が用いられたのです。

つまり、ｏｎｅ（オーエヌイー）という“文字の集合体”が ouni:という発音を表すことにより、ouni:という発音の言葉の持つ“意味”を読み手に伝達することが、“表音文字”に許された唯一の表記法だったのです。

だから、「表音文字とは、表音という手段により、表意という目的を達するために考えられた“用法”である」と言うことができると思います。

言葉の持つ“音声”は、言葉になくてはならない要素ではありますが、音声そのものに価値があるのではなくて、その音声が、特定の意味を人に伝えることができるということにおいて、初めて価値があるのです。

だから“表音文字”は、それが人に特定の意味を伝える限りにおいて価値があるのであって、意味を伝えることのできない“表音”それ自体には、何の価値もないのです。

ouni:という発音が oun という発音に変化した時、on という表音的表記法に改めなかったのは、on という表記が oun という音声を忠実に伝えることはできても、その言葉の持つ意味を伝えることにおいては、one という綴りに及ばなかった。だから、表音的には i:という発音を表す“e”という文字が不要になったにもかかわらず、元の one という綴りを固守したわけです。

このように考えませんと、この one という綴りが、その言葉としての発音の変化に関係なく保持されて来た理由を、理解することができないと思います。

このように、欧米諸国では、いずれの国においても、表音文字を用いてはいますが、決して“表音的”ではありません。すべて、“表音”という手段により、“表意”という目的を果しているのです。

だから、綴りがひとたび固定されますと、その言葉としての発音がどのように変化しようとも、綴りは決してその変化のあとを追わず、その“文字の集合体”である“語形”を大切に保持することに努めて来たのです。

one の場合には、16 世紀以降、四百年にわたって変化しないこの綴りが、“表語文字”的効果を高めて、表音文字としての欠陥を補っているのです。ムーアハウスが、「表音文字の表意化」と呼んで、これを表音文字の退歩だとしているのは全くの見当違いで、これこそ進歩であると言わなければなりません。